

## 1 目的

RLC 回路の過渡現象を観測し、回路の動作を理解する。

## 2 理論

図 1 に示す回路で、最初、スイッチ S は A の側に倒してあり、十分長い時間が経過しているものとする。キャパシタが直流電圧  $-V$  で充電されている状態で、時刻  $t = 0$  において、スイッチ S を B の側へ切り替えて直流電圧  $V$  を印加する。印加される電圧の時間変化は、図 2 の階段状の関数で表される。

この場合の回路方程式は、回路に流れる電流を  $i(t)$  として、 $t > 0$  で

$$L \frac{di(t)}{dt} + Ri(t) + \frac{1}{C} \int i(t) dt = V \quad (1)$$

となり、これよりキャパシタの電荷  $q(t)$  に関する微分方程式

$$L \frac{d^2 q(t)}{dt^2} + R \frac{dq(t)}{dt} + \frac{1}{C} q(t) = V \quad (2)$$

が得られる。

(2) 式の 2 階線形微分方程式は、特性方程式  $Lp^2 + Rp + 1/C = 0$  の解の判別条件に応じて次の解をもつ。ただし、 $C_1, C_2$  は初期条件で決まる定数である。

1.  $R^2 > 4L/C$  のとき

$$q(t) = C_1 \exp\{(-\alpha + \beta)t\} + C_2 \exp\{(-\alpha - \beta)t\} + CV \quad (3)$$

$$\text{ただし } \alpha = \frac{R}{2L}, \quad \beta = \sqrt{\left(\frac{R}{2L}\right)^2 - \frac{1}{LC}}$$

2.  $R^2 = 4L/C$  のとき

$$q(t) = (C_1 + C_2 t) \exp(-\alpha t) + CV \quad (4)$$

3.  $R^2 < 4L/C$  のとき

$$q(t) = C_1 \exp(-\alpha t) \sin(\beta t + C_2) + CV \quad (\text{減衰振動解}) \quad (5)$$

$$\text{ただし } \alpha = \frac{R}{2L}, \quad \beta = \sqrt{\frac{1}{LC} - \left(\frac{R}{2L}\right)^2}$$

(5) 式は  $q(t) = C'_1 \exp(-\alpha t) \sin \beta t + C'_2 \exp(-\alpha t) \cos \beta t + CV$  と表すこともできる。

### 3 実験

### 4 結果

### 参考文献

- [1] 電子システム工学基礎実験テキスト